

研究区分	教員特別研究推進（地域振興）
------	----------------

研 究 テーマ	映画制作における地域づくりの効果に関する研究				
研究組織	代 表 者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	大久保 あかね
	研究協力者	所属・職名	グローバル地域センター ・特任教授、副学長	氏名	酒井 敏
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	細川 光洋
		所属・職名	京都芸術大学 映画学科・教授	氏名	山本 起也
	発 表 者	所属・職名	経営情報学部・教授 京都芸術大学映画学科・教授	氏名	大久保 あかね 山本 起也

講演題目
映画を単なる「消費物」としないための地域の取り組みについて
研究の目的、成果及び今後の展望
本研究では静岡市を舞台に制作される映画『うさぎのあしあと』を題材に、その製作準備や公開を「地域」とともに進めることで、現代の「消費物化」とは一線を画し、映画が本来持っているはずの大きな可能性を追求する。具体的に言えば、映画（製作）とは「社会を活性化させるためのツール」であり、「地域の魅力を広く発信するための観光資源」であることを実証する試みである。 研究は2023年に着手した。学生や市民を対象に、特別公開講座『映画×地域』を実施し、受講した市民の中から有志約30名が製作に参加を表明した。2024年、映画の「ロケハン」を通じての「地域の魅力探し」がスタートした。また、それぞれの特技や関心などをもとに、「映画の美術・装飾」「車両・運搬」「エキストラ」などの領域において、具体的な準備に市民が参加する体制を2025年に整えた。3年間の準備を経て、2026年1月から2月にかけて、市民参加のもと映画『うさぎのあしあと』の撮影が、静岡市清水区、葵区、掛川市などで行われた。 近年、1年間に映画館で公開される映画の本数は、2025年度は1305本であり、そのうち694本を邦画が占めた。コロナによる一時的な落ち込みはあったが、それ以降邦画の公開本数は増加の一途を辿っている。背景に、シネコンによる多スクリーン化、デジタル技術の導入による制作予算の低廉化などがある。 これは映画にとって本質的に「豊かな」状況とは言えない。何故なら、映画の「消費物化」がより進行し、多様性が失われつつあるからだ。「観客が入る映画」は延々と上映が続き、「入らない映画」はあっという間に打ち切られる。その受け皿となっているのが、配信かもしれない。「入った映画」は配信でさらに利益を膨らませ、「入らなかった」映画は配信で少しでも積み増しできないかと足掻く。 映画は興行物である。当然、経済に左右される。映画製作には多額の資金が必要で、製作会社やプロデューサーは、企画の段階から常に誰かにお金を払い続け映画の製作を進行させる。スタッフ、キャストのギャランティ、ロケの宿泊や食事、車両や交通にかかる費用、さらには編集仕上げから宣伝に至るまで、全てを「払い続け」劇場公開に漕ぎ着け、ようやく利益を得る。そして、そこからすかさず「配信」と言う次の「利益を産む」場へと作品を移行させる。 残念なのは、この消費サイクルが年々早まっていることだ。そして、映画を作る側も見つめる側も、この「消費サイクル」に絡め取られ、それにいつしか「慣れて」しまっていることである。 そこで本研究では、映画の準備や撮影に参加した市民を対象に、インタビュー調査を実施し、映画制作への協力の動機や熱意の高まり、映画制作および上映後の期待感などを分析する。それによって、映画に関わった方々の手で社会にどのように発信していくかを検討、実施し、最終的にはロケ地に多くの観客が足を運ぶようなコンテンツ・ツーリズムの波を撮影地静岡に生み出す方策を検討する。